

渡名喜島の民俗

上江洲 均*

渡名喜島へ

泊港を出て慶良間の島々がとぎれる頃から渡名喜島は一段と近くなる。耕して天に至る段畠が見えるころには、どうやら船酔いもおさまる。渡名喜島への3時間の船旅である。珊瑚礁を切り取った船道は、船をそのまま棧橋へ横着けさせてくれる。

上陸して位置をたしかめると、ここは島の西側である。港の向いには、現在射爆場になっている入砂島があり、そのはるか彼方に久米島の島影がかすんで見える。

村役場の前の道が中央道路で、それを東へ進むと、村は細長くどこまでも続く。しまいには東海岸に達してしまう。部落が島を二分する形で東西に長くのびていることがわかる。部落の南北には、わずかな平地があり、その先へは嶮岨な山が連なる。

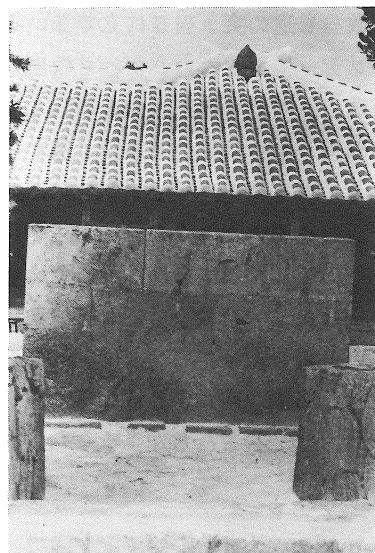
耕して登った山も今では、雑草のはびこるところとなつたが、かつての島人の苦労のあとは読みとれる。北の山にはお宮がある。そのあたりがサトウ（里）といって、遺跡があるという。その遺跡に人が住んでいたころよりもはるかな遠い昔、現在の村の位置は、東西の海の潮が行き交う小さな海峡だったのだろうと、自分勝手な想像をする。

部落は福木の屋敷林で囲まれ、激しい台風時の潮風から守られている。この木は、ガジュマルその他のどの木よりも潮風に強い。渡名喜の福木は、樹齢100年から150年とみて、おそらく18世紀も後半の植樹であろう。島の先達は、子孫のためによいものを遺してくれたと思う。

福木の木が遺産なら、掘り下げた屋敷もまた遺産であり、島の特性の一つであろう。屋敷を掘り下げるということは、粘土質土壤地帯では考えられないことである。屋敷内を掘ると白い

砂が出る。この砂のおかげで、水はけをよくし、浸水することがないのだという。

かつて小さな茅葺き小屋を台風から守るには、これしか方法がなかったようである。深い所で道よりも1メートル以上も掘り下げている。掘って出た砂は浜へ捨てたという。それをすべて人力でやったというから驚嘆する。100坪の砂を1メートル掘り出して捨てるのは、トラックのある現在でも大変な仕事である。かつて慶良間の渡嘉敷島の阿波連で、掘り下げた屋敷を見



屋根獅子をおいた民家

たことがあるが、規模の上では、渡名喜の比ではない。かの有名な台湾蘭嶼（紅頭嶼）の掘り下げ屋敷に匹敵するほどである。

近年は新しい傾向として、屋敷を埋めもどしているのを見かける。鉄筋コンクリートの住宅なので、台風の心配も少ないのである。村では、道路に一条の排水溝をつくり、まだ多い掘り下げ屋敷への浸水を防ぐ努力をしている。

サンゴ石を積み上げた美しい石垣があり、門

の突当たりに必ず立っているヒンブン垣も絵になる。サンゴ石ばかりでなく、瓦を積み上げたのもある。これらは福木の縁の中にあって、古風なたたずまいを見せてくれる。

サンゴ石利用では、他に豚舎がある。アーチ状に屋根を積み上げた豚フルである。これは大正期に多く作られたといい、石工は沖縄本島の小禄からやって来たという。

石敢当

部落内のあちこちに「石敢当」がよく見つかる。文字を刻んだのでは、旧学校近くのユクミ（横目か）という屋敷の裏にある石敢当が古いといわれている。石質は、島の言い伝えによると中国産の石ということであるが、これはどうも砂岩系で、せいぜい沖縄本島産であろう。無文字の石敢当も道の突き当たりに立てている。これを「カンデーイシ」というが、「敢当石」つまり「石敢当」の訛りのようである。

道の突き当たりをキリンチという。道から真直ぐのところにある門をキリンチジョーといって、魔物が侵入しやすいというので嫌う。それを防ぐために門の脇に石敢当またはカンデー石を立てる。直接のキリンチでなくても屋敷の隅に石を立てている例もある。

四つ辻は、魔物の跳梁するところである。そのような所では、若者たちが「チキシ」と呼ぶ



カンデー石

丸石を力いっぱい地面に叩きつけたりした。チキシは、いわゆる「差石」である。若者たちが、

力試しに持ち上げる石である。それを魔物払いに地面にたたきつける習俗があったのである。

葬式の際の魔物払いはどうするかと言えば、葬家では、自家の畠にデーク（だんちく）を差したという。また他の家では、デークを屋敷の石垣に差したり、あるいは門に漁網を張ったりしたという。漁網は一種の魔よけであったわけで、これのない家では担い棒を門に横たえて置いた。

旧暦8月10日に家の軒に差すのを「シバ」という。シバサシという行事であるから、順当な呼び方であろう。そのシバは、サトウのお宮へ祈願に行った帰りに取って来たスキでつくる。門に立てないのは珍しい例である。ゲーンとかゲーヌという呼び方はないようである。

8月10日のシバサシ行事は、奄美から沖縄に濃厚に分布する行事であるが、その習俗は渡名喜の場合も沖縄型の範ちゅうから抜けるものではないようだ。

鰹船などの払いは、神女がスキを結ってやった。

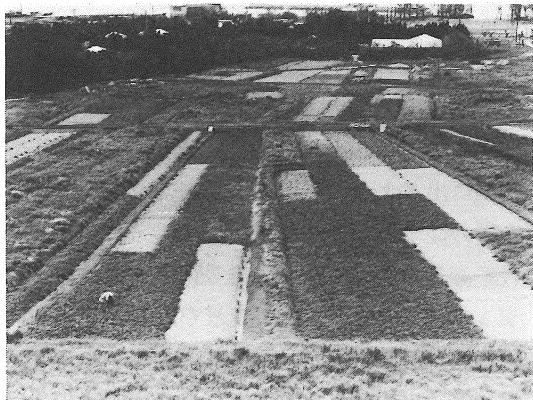
食物にそっとのせて、魔物の侵入を防ぐものを「サン」という。これは芭蕉の葉を小さく裂いて結んだものである。今でも夜道で食べ物(煮物)を携行する時はサンをおく。そこに「モノ」を恐れる島人のこまやかな心情を垣間見る思いがする。

鰹漁と大島交易

渡名喜島は耕す土地に恵まれていない。等分に地割した土地が、平地にはまだ残るが、その境界は石を立てるのではなく、木を植えるのでもない。サデク（浜ゆう）という草を植えて境界としている。土地の不足分は、山地を開墾したのである。それにわずかばかりの水田も昔はあった。

しかし、これだけの耕地を男性が真剣に耕すには到底足りない。従って農業は女性にまかせて、海へ出た方が得策である。渡名喜の男たちは漁民として知られる。とくに、鰹漁では先進

地で、戦前のこと、久米島にその指導で行ったこともあったほどである。



きれいに地割りされた畠

久米島には漁民として移住した人たちもあり、現在も久米島仲里村の真泊やオーハ島に渡名喜出身者が多い。

戦前のこと、沖縄本島からやって来た知花という教員がいた。彼は滞在中に「渡名喜島の歌」をつくった。その歌詞は次のようなものである。

1. 島尻郡の西のかた 二十九海里離れたる南
北一里のわが村は 水産業にて名を得たる

2. 字は東西南 清き平和のうるま島
朝な夕なに日を浴びて 鍬取る乙女の美しさ

3. 南の小屋や中小屋や 西小屋みい小屋並び
立ち 山なす鰐のその群れは
豊かな島のしるしなり

(4番以下省略)

男は鰐漁に出、女は鍬を持つという島の生産のあり方を如実に表現していておもしろい。4つの鰐工場から勢いよく立ち上がる煙が目に見えるようである。しかして、現在も夏場の鰐工場は活気がある。

鰐漁は、早朝3時ごろ餌獲りに出かけ、早いときで6時、遅い時で9時ごろ出漁し、午後2時～3時ごろ帰ってくる。不漁のときは夜の9時～10時ごろ帰ってくるという。

鰐漁の前は、国頭地方や伊江島・伊平屋島・与論島付近で貝の採取や追込漁を行い、久米島近海でイカ漁に従事した。松のくり舟から杉板はぎ舟へと代ったが、現在はエンジン搭載へと代り、隻数もかなり多い。

それとは別に、かつては奄美の島々へ出かけ交易をしたという。例えば、「西の大屋」、「ハントウ大屋」、「カーヌイリー」という家などは船持ちで、交易の元締めであった。それは明治中期以前のこと、那覇の泊港を本拠地として大島通いをしたという。那覇から奄美の島々への品物は焼物が多く、大島から那覇へは芭蕉布や材木であったという。

行きは6月のカーチーベー（夏至南風）の吹くころで、帰りは10月の寒露の節に入つてからで、年1回の往復であった。そのころの渡名喜の港は、東岸のアンジェーラグチであった。

壺屋焼の酒徳利に「渡名喜びん」というのがある。これは大島へ渡名喜船が売りに行ったことからついた名ではなかっただろうか。渡名喜びんは、ユシビンと称する瓢箪型酒器の一種である。沖永良部では、調査の折このユシビンをよく見かけた。おそらく渡名喜船がかつて運んだのも多かろう。「渡名喜びん」の名の由来をこの交易船に関係づけて考え、鰐漁以前の渡名喜島の男たちの海とのかかわりに、一つのロマンを描くのである。

漁業

漁業については、すでに鰐業の話をしたのだが、ここではとくに原始的な漁法を紹介したい。

宝貝の貝錘をつけた網を見る。これを一般にアミジケーアミという。網の高さ1.5メートル、全長12.5メートルであった。木綿糸に豚の血を染めた網である。イラブチという魚を獲るのに使用するところから、イラブチ網ともいった。網は海中では岩にひっかけておき、そこへ2～3名で潜って小魚を追い込む方法である。

昔は東海岸に石を積んだ「カキ」があった。これは干潮時に沖へ逃げおくれた魚を獲るのが

目的であった。カキは東の浜に2ヶ所あったというが、完全なのは残っていない。この浜をアガリハマというが、カキはそのむこうの海中に長く作られていたという。その内側をとくに「カキの内」と呼ぶことがあったという。



漁船（サバニ）

「マチャミ」という網漁があった。「待ちアミ」の意で、満潮時に張って魚がかかったところを引きあげる網である。用心深い魚に対しては、石を投げておどして網へ追いこみ、かかるのを待って引きあげるという漁法である。カキの一種であるが、おもしろい漁法である。

話は脱線するが、この東海岸のわずかな地域にも地名があるのには驚く。まずアガリハマ（東の浜）の右の一角に小石が2～3立っている。タチガン（立神）という名がついている。昔はここも信仰の対象になっていたことであろう。

アガリハマの端に小さな岬があり、そこをマサキと呼んだ。マサキを廻って行くと、アンジエーラ浜に至る。そこは入江になっていて、畠地がひらけている。アンジエーラ浜の向うにイフと呼ばれる砂地があり、ナゲーラ、ハマガマ一などの浜が続く。その向うに大きな岬があり、先端をウムヌハナと呼んだ。

アガリハマを中心にして、ウムヌハナから北の岬のガンバラへ向けて、一条の干瀬が見える。これは島を囲んでいるサンゴ礁の端である。ガンバラの前にはウンヌシという岩が海中に浮んでいる。その北から順にサンゴ礁の端に地名がついている。アマチチ、ピブク、ジャーピ、ウ

ンドウマイ、ナカンシ、ハシヌビなどである。ジャーピは港口であるという。ウンドウマイもそうだったのかもしれない。

島人は、アガリハマやイリヌハマ（西の浜）に広がる広大なサンゴ礁上で漁をなした。しかし男子が遠くへ出かけて、貝採取やイカ釣りや鰐漁に出るようになって、サンゴ礁上の漁撈は女性の従事者が多くなった。

干潮時の女性の海への持ち物は、ティル・チジュル・ウギン・ティブクなどである。ティルは獲物入れの籠、チジュルは首のしまった籠で、獲物追込み用である。ウギンはやや弯曲した一本モリで、モリ先には一つの鉤がついている。ティブクは、畑でイモ掘りや除草に使った小農具であるが、海では貝とりに使った。

チジュルは、主にスク用であるという。アイゴの稚魚が群れをなして寄ったとき、藻の中におりてすぐくう籠である。使い方は足の間に挟んで、両の手でかき寄せるように魚を追い入れる。大チジュルは、ウル（サンゴ）を上から棒で打って、驚いた魚が逃げこんだところをすくいとする籠である。これは2人でやる漁撈で、たいてい家族単位でやった。戦後も一時期までのこっていたが、今はあまり見ないようである。これでは、割合大きいイチャビラやミーバイという魚を獲った。

この籠は、糸満の「ティルルー」、伊平屋島の「チズカ」、沖永良部島の「チニル」に共通のものと思われる。大チジュルなどは、伊平屋の「ウルワイチズカ」に非常によく似た漁法である。

アムルという網があった。これはサデ網の一種で、女性用であった。旧暦の2～3月ごろサビという細い雑魚をすくう。

ウギンは蛸専用である。サンゴの穴にウギンをして蛸を突き、鉤でかけて穴から引き出し、庖丁で蛸の眉間を切って殺す。これらの獲物がティールから逃げ出さないために、針に糸をつけた「トゥムンチュ」というのを持った。これは魚を貫くこともある。魚を突くのには、三本モリのイチュギを使ったが、女性専用ではない。

磯の上を歩くのに、現在なら地下タビを履くが、昔はワラでつくったワラグチを履いた。

夜のイザイもやっている。現在はテーランプ（イザイランプともいう）というトタン製の石油ランプを携帯するが、昔は山竹でテー（たいまつ）をつくった。山竹を20~30本位束にしたのを2束持って海へ出た。その後角ランプになり、現在のテーランプに変ったという。

イザイでは、蛸の一種のシガイをとった。手が長いシガイを「アカマター」、短いのを「マシガイ」と呼んで区別する。

また、貝拾いでは、ギシクンやマービーという貝を拾った。2枚貝で、ティブクで掘る。アジケー（シャコ貝）もそうである。これはよく塩辛にした。貝で美味しいのは、アワビやカタンナ（サザエ）である。貝の一種のチジャラグワーも採った。

夏はガチチ（うに）を探る。黒くて針の長い食用に供さないガチチは、サツマイモ畑の肥料にした時代もあった。

海のカニをつついで汁にすることもあった。カタバルガサミという蟹である。これは古なベ等に入れてつついで、殻を除いて豆腐状にして食べた。

海藻のモーイやナマコとりに行くのも女性である。キャベツや胡瓜、ニガウリなどといっしょにスネー（あえもの）をつくるが、変った味である。

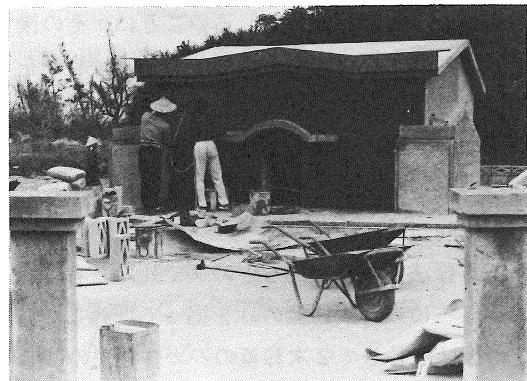
渡名喜からの帰りに同乗した渡名喜出身の婦人たちから、浜の名を教えてもらった。彼女らは、船窓から見える白砂の小さな浜の名を一つひとつ答え、さらに島の全部の浜の名を教えてくれた。まず西側から南へ向けて、(1)イリのハマ、(2)クワーマ（小浜）、(3)タカタのハマ、(4)ユブクのハマ、(5)ハタキジリ、(6)ウーハマ（大浜）、(7)ピガマーとつづき、東に(8)アンジェーラバマ、(9)アガリハマ（東部落の人はメーヌハマという）、(10)アガリクワーマ（東小浜）、北に(11)マクシのハマ（真後の浜）、(12)シュガーと

つづく。

岩場の間にある小さな砂浜にも名がある。そのようなちょっとした所にも島の人たちの思い出はしみこんでいるのだろう。

墓のこと

渡名喜の墓制は、はっきりした両墓制の形をとっている。まず、死者を納めた木棺を安置する所がグショーと呼ばれる第1次葬の墓地である。グショーはアガリウチ（東部落）、ニシンダカリ（西部落）、ヘーンダカリ（南部落）の3つの地域に各1ヶ所の割にある。地域別墓、いわ



墓づくり

ゆる「村墓」の遺風を感じさせる。グショーの墓室は13から15室あり、各室棺箱一つである。風葬所と考えることができよう。

ところが、翌年の7月と10月になると洗骨をして、第2次葬の墓地へ移される。この墓を「ハカ」、または「シンジュ」と呼んでいる。その墓は破風墓、亀甲墓であるが、これらの歴史はそれほど古いものではない。岩穴や岩間に囲った墓が多く、この方は古い形式である。破風墓は渡口家の墓で、俗に「チカジ墓」と呼んでいる。これは渡口ペークミ（親雲上）、上間首里大屋、ムクジヒジャーという3人の共同墓として造営され、その子孫が使用して来た。

ところで、この墓については、同渡口家には古文書がのこっている。乾隆30年（1756）の「言上写」を掛軸に書き改めたもので、その中に次の二文がある。

「……且彼島（渡名喜）之儀、往古より墓所無之、葬送之時ハ洞ニ葬來候処、南風原初て墓作立候付、所中江も致感心、漸く墓相仕立……」

そのころ南風原親雲上と呼ばれた渡口家の祖の功勞に対し、位階を請う文章の一こまである。18世紀の中ごろになって、ようやく沖縄本島風の墓が造営されたことがわかる。それも家単位の墓ではなく、共同墓だった点は、古くからの遺風を守っているようである。

南風原親雲上や彼に刺激されて墓づくりをしたのが、何名かいたことは、前記の古文書で察しがつく。ところがおもしろいことに、その後それほど増えなかったものらしく、古い岩間を囲っただけの墓がまだ多く見受けられる。しかし、崎しい山の中腹あたりに位置する墓は、不便この上もないところから、最近墓を新築して移す傾向が強い。

特殊葬法では、癩病などの病で死んだ者は、グショーに入れず、側の砂を掘って埋葬した。その後は洗骨して2次葬墓のハカへ移すのは同じである。しかし、異常死の者の骨は、崖葬墓で見たかぎりでは、少し離れたところで葬っており、同等な扱いは受けていない。ハブ毒で死亡した者も、異常死として扱われている。

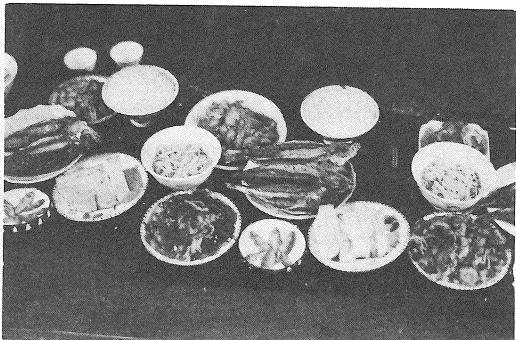
三十三年忌祭

旧暦7月と10月は洗骨の月である。8月は祝い月であるとして洗骨や法事はしない。厳密に言うと、7月は七夕あたりに集中し、盆入りの13日以降9月中までは行わない。9月は法事の月である。

葬式後3日までは、遺体を葬ったグショーハ通い、あとは7日ごとに墓参し、49日でグショーハへの墓参を終える。翌年の7月に洗骨して2次葬墓へ移してからは、正月16日と3月の清明祭に墓参する。あるいは、7月の七夕の日に墓掃除に行くだけである。

法事は、百ヶ日・イヌイ（1年忌）・3年忌・7年忌・13年忌・25年忌・33年忌と取行われ

る。本来これらの諸行事は、その都度行われる



33年忌のジングミ

のが順序であろう。ところが、渡名喜島では百ヶ日以降のすべての法事を延期し、最後の33年忌にまとめて行うことが多い。1回にまとめる関係で、経済的にも大へんである。それも1人にかぎらず、死亡した幾人かの法事をひとまとめにすることが多いからである。そこでいきなり親が力が足りないときは、息子へ引継ぐことになる。

2～3年前から予定を立て、その年に入つて死者の生れ年（えと）に合わせるように日を選ぶ。

まず魚を必要とする。渡名喜では諸行事に魚を必ず使うが、シューコー（法事）には、人を頼んで（タルミチュという）魚をとった。それは10名位で行う追い込みであるが、大きな魚を釣ることもあった。保存のために塩づけにし、浜や屋敷内に棚をつくって日干しする。昔は150斤（90kg）袋で7～8袋、数にして3,000尾にも達した。ごはんは3斤もするおにぎり（三斤ンパイといった）を参拝者にふるまったくから、ごはん炊きも幾鍋もおいてやつた。

前日には豚も屠殺する。大豚1頭に、あとは死者の数だけ頭数を揃えてやつたが、今は120斤位の中位の豚をたいてい2頭屠殺している。

33年忌は2日間つづいた。1日目は線香をたき、膳組みといって、七皿おいた膳を死者の数だけ仏壇に供え、また餅も死者の数だけの皿を準備した。2日目は、ごく近い親類（とくに死者に由縁の深い人々）が集まり、豚汁を食べ

る。この2日目の行事は、大正ごろまでは、「三十三年忌のユエー」といわれるほど歌三味線で賑やかにとり行われたが、現在は2日目は、簡略にすませる傾向にある。

仏壇に位牌を安置していない家が多い。あってても名が記されていない。私が法事を取材させてもらった家も位牌を収める家型の差物厨子を置いているが、中には位牌は納まっていない。それでいて、毎年のタチビ（命日）には忘れずに茶などをあげ、線香を立てるのである。

餅は33年忌の人ならば、大皿に盛り上げるようなたくさんの数量になる。それも百ヶ日から以後の年忌を延期している例が多いからである。百ヶ日が餅1個、1年忌は2個、3年忌3個、7年忌7個、13年忌、25年忌、33年忌とその数を加えていくと84個になる。それだけの餅を大皿に盛ったのである。これを死者の数だけ準備するから大へんなことである。

ウチカビ（紙銭）も死者1人につき、餅同様に準備して焼いている。もっとも今では餅は大皿に適当な数を盛り上げるだけで数は定めないが、ウチカビはその数だけ焼いている。33年忌までだと84枚の計算になる。それを大きな金だらいで焼いている風景は、まさに壯觀というほかない。

仏壇には、井の字型に砂糖キビを裂いており、その上へ赤土を握ったものを置いている。これには生大豆を十字型につけており、死者の数だけつくるが、名称は詳らかでない。死者の頭蓋骨をあらわすといい、豆は歯を意味するという。

33年忌の日は、朝墓参し、線香をともして死者の靈を案内することから始まる。午前中に死者に最も近い親戚を呼んで焼香し、ウチカビを焚き、終ると皆でジングミ（膳組）に盛ったごちそうを回して食べる。これを食べるのは、死者に最も近い人たちである。

午後は一般の人々の焼香である。庭に張ったテントの中まで人がいっぱいする。100名前後の招待客は、前日のうちに案内を受けている。

客への配膳は、吸い物・魚のサシミ・カステラ菓子・前々から準備した魚・大きな豚肉・みかん・餅1個である。さらに帰りには、サラダ油などもそえるから、帰りは両手いっぱいというところである。

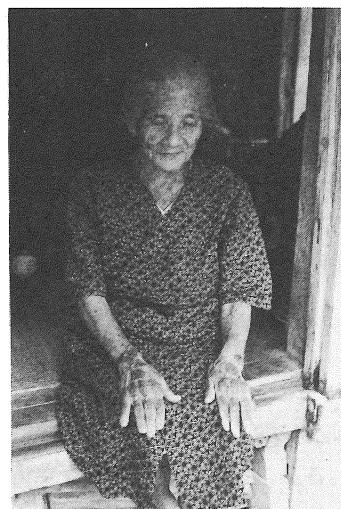
このようなシユーコー風景は、渡名喜島以外ではあまり見られないのではないかろうか。人間の一生をしめくくる33年忌であるが、そのなんと心労な法事であることか。これだけ人間の重さを厚く扱っていることは、考えてみれば、誠に感動的なことである。

針 突

渡名喜島では、高齢者を呼ぶときの尊称は「ヒャーク」である。ヒャークは「百」であろうが、死亡のことを「ヒャークしたそうだ」と表現している。そのヒャークたちのうち女性をえらび比嘉松吉氏と共に、8名の方々を訪問し、両手のハジチ（針突）を見せてもらった。ここでは、調査した8名の方々の簡単な紹介をし、稿をしめくくりたい。

(1) 比嘉ウシさん（明治26年生、88歳）

ハジチをやったのは17~18歳ごろのこと、1回でやった。1日仕上げであった。針は10本くらい束にしたもの用いた。ナハでやったが、その場所は憶えていない。



針突（比嘉ウシさん）

(2) 上原菊江さん（明治26年生、88歳）

20歳の時那覇でやった。5日間滞在して6日に帰って来たが、ハジチをやったのは1日で、朝から晩まで長時間に及んだ。それをやったのは女人で、当時50歳くらいだったと思う。場所はわからない。

(3) 比嘉カメさん

嫁に来る前の20歳ちょっと過ぎに那覇でやった。1日で終ったが、たぶん6～7日くらい滞在したと思う。代金は父が払った。

(4) 上原マサさん（明治25年生、89歳）

那覇で19歳の時やってもらった。その時はもう結婚していたから、舅につれられて行ったが、その時の旅費を含めた300貫（6円）は、実家の父が出した。実際に針突をしたのは1日だった。これをやらないと死後芦の根に掘らされるといわれた。

それで、まだハジチをしない若い女が死亡した時は、手の甲に墨でハジチのかっこうを描いてダビをした。島へ帰って来ると、皆が羨ましがって見に来た。

(5) 上原カメさん（明治27年生、87歳）

20歳の時父につれられて那覇でやった。その代金は父が払った。この時は他の4人の仲間と

いつしょだった。これをしないと、死後芦の根を掘らされるといわれた。そのころまでは、渡名喜の女は一生に一度だけ、ハジチをするために島を離れたのである。

(6) 上原カマさん（明治26年生、88歳）

18歳の時那覇でやった。代金は記憶していない。場所は渡地の前で、平安名のハンシーという婆さんがやった。16歳ごろ久米島へ渡ったついでに、むこうでやらせていた。久米島のものは少し細く、手の甲に菊花型があって、少し異っていた。それを那覇へ行った時修正してもらった。細いのは太くし、菊花は円形にした。この時はあまりに痛いので、氷砂糖を口にふくんで我慢した。

(7) 仲村カメさん（明治25年生、89歳）

嫁に来る前、父が那覇へつれて行って突かせてくれた。宿泊したのは泊だった。

(8) 桃原邦子さん（明治25年生、89歳）

私の場合、結婚してから姉につれられて那覇へ行ってやった。ハジチは1日で終えた。私は望んだわけではないが、そのころの風習にしたがった。若い娘が死亡した時は、手の甲に墨でハジチの模様をつけて納棺していた。

（※年齢は昭和55年。）